

教師が果たす障害理解教育上の役割

ーある小学校における学級通信を手がかりにー

Emi KATO
加藤 映美*

I. はじめに

現在、我が国では、「共生社会」の実現に向け、障害のある人々を取り巻く周囲の人々の「障害者理解」の推進が叫ばれている。

教育現場では、その推進に向けた取り組みを「障害理解教育」として行っており、また、それに伴い、多くの実践報告が出されている。加藤（2015）は、障害理解教育の動向をまとめ、最近の障害理解教育は、(1) 交流教育を通して障害理解を図ろうとするもの、(2) 「障害」の疑似体験を通して障害理解を図ろうとするもの、(3) 教科書・副読本を通して障害理解を図ろうとするもの、の大きく3つの活動を通して行われていることを明らかにした。

また、加藤（2017）の論文では、現在の障害理解教育の概念を明らかにしようと試み、その結果、それは「障害の状態や特性」といった知識やそれに応じた「障害者へのかかわり方や援助方法」といった知識の習得を中心に、最終目標である「障害者への援助行動の出現」を目指すものとされていると結論づけた。

これらを総括すれば、現在の障害理解教育は、「障害理解教育」という一授業の中で、交流や疑似体験といった活動、そして、教科書・副読本を通して、「障害の状態や特性」、「それに応じたかかわり方や援助方法」といった知識の習得を目指すものであり、そして、最終目標である「障害者への援助行動の出現」を目指すものであるとまとめることができる。しかし、筆者はこの現状に対し疑問と限界を感じている。

筆者は、現在のような、「障害」、そして、それに基づいた「かかわり方」を知識として理解する障害理解教育ではなく、「障害者」を「一個人」として理解することができるような教育として障害理解教育が展開されていくべきであると考えている。このように障害理解教育を考えると、それは一授業の領域を超え、学校生活全体を通じて、子どもたちに伝えられていくものであると考える。では、学校生活の中でどのように「障害者」を「一個人」として理解することを子どもたちに伝えていくか。そこで、筆者は「教師」の存在と役割に注目し、「教師の姿」という教材を通してそれを子どもたちに伝えていくことができると考えた。本論は、このような筆者の考えの根拠を追究するものである。

* 静岡県掛川市立桜木小学校

II. 目的

「障害者」を「一個人」として理解することを子どもたちに伝える障害理解教育実践において、「教師の姿」が有効な教材となり得ることの根拠を追究する。

III. 方法

ある小学校で発行された学級通信をまとめた「みつぼし通信～若草小学校みつぼし学級の記録～」(中込・新津・依田, 1998)を分析し、「教師の姿」が子どもたちの障害理解、筆者が考えるような「障害者」を「一個人」として理解しようとする障害理解を深めていく可能性を示す。手続きについては、以下のものとする。

1. 本文献を分析し、描かれている内容を次の項目に分類する。なお、本論では分析対象とした学級をM学級と示す。
 - (1) M学級の担任である3名の教師の思想、具体的に述べれば、彼女らの「障害観」や「障害児教育観」を著している内容。
 - (2) 教師たちのM学級の子どもたちへのかかわり方を著している内容。
 - (3) そのかかわり方に影響を受けた子どもたちの様子を著している内容。
2. 項目別に分類したそれらより、いくつかの具体的なエピソードをそれぞれ示し、考察する。
3. (1), (2), (3) の項目のつながりを示し、教師の姿が子どもたちの障害理解に影響を与え、それを深めていく過程を示し、学校生活全体を通じて行われる障害理解教育の在り方を考察する。

また、本文献を選定した理由についても示しておく。一つは、教師のかかわりや子どもたちの様子が非常にリアルに描かれているということ、もう一つは、3名の教師とM学級の子どもたちとのかかわりが他の子どもたちに伝わっていく様子がはっきりと見て取れるというところにある。これらを、本研究において本文献を扱う根拠とする。

IV. 結果

まず、本文献について説明を加えておく。

本文献は、W小学校M学級の3名の学級担任により、毎週全校に出されていた学級通信をまとめたものである。そこでは、M学級での子どもたちの生活や学習活動の様子、校内で行われる通常学級との交流の様子、学校行事への参加の様子、といった子どもたちの学校での様子はもちろん、3名の教師の日常に起きた出来事やそれを通して考えた彼女らの思想等の3名の教師の個人的事情もつづられている。

では、本文献より、教師の姿が子どもたちの障害理解、筆者が考えるような「障害者」を「一個人」として理解しようとする障害理解を深めていく様子を探っていく。なお、以下で取り上げ

る学級通信は著書として発行されたものであるため原文ママ示す（下線部や略は筆者によるものである。）。したがって、児童や教師の名前についても原文ママ示す。

1. M学級の担任教師の「障害観」および「障害児教育観」

ここでは、M学級の学級担任である3名の教師の「障害観」および「障害児教育観」を学級通信より探る。以下、それが著されていると筆者が考える内容を抜粋し示す。そして、それを考察し、そこにある3名の教師の「障害観」および「障害児教育観」を示す。（下線部は、教師の「障害観」および「障害児教育観」が示されていると筆者が考える部分である。）

ー通信ー みつぼし 第147号 平成10年10月30日

情をよせるということ

今日の話題は、「自閉症」です。…略…。

漢字に大変興味を持ち、漢和辞典にある漢字はおろか、梵字と呼ばれるミミズのはったような文字でさえも読んでしまう子、廊下を歩く時は、廊下の隅を忍者のように歩かないとパニックをおこしてしまう子、窓の外のチューリップが開くや否や、窓から飛び出して行って、その花をみんな摘んでしまう子など、いろんな「自閉」と呼ばれる子どもと出会いました。しかし、どんな本を読んでも、その子との付き合い方は書かれていませんでした。結局、「自閉（広汎性発達障害）と呼ばれる子であろうとなかろうと、ヒトと付き合うのに何ら変わらない。」という事がわかりました。「ちょっと、みんなと違うだけそして、そのちょっとがとても面白い。」そう思えるようになりました。

特殊学級の先生は、現在あまり人気がありません。勧められた人は殆ど決まって、「専門の教育を受けていないから…」と言います。果たしてそうでしょうか？「ヒト」を教育するのに何の代わりがあるのでしょうか？教育とは、心を通わせていくものだと思うのです。教室という場所で先生と子どもが心を通わせ、何かを作り上げていく、それが授業だと思うのです。

（略については筆者によるものである。）

本通信は、「自閉症」という障害を切り口に、教師たちの考える「障害観」「障害児教育観」を示しているものであるとまとめることができると考える。

そこで教師たちは、「障害児」も我々と同じ「ヒト」であること、そして、「障害児教育」も通常学級での教育と変わらず、「ヒト」と心を通わせ、彼らと共に何かを作り上げていくことよって「ヒト」である彼らを育てていくものであることを示している。

ー通信ー みつぼし 第19号 平成7年9月29日

貴絵ちゃんのチュー

1学期の終わりごろから困ったことがおきるようになりました。貴絵ちゃんが帰り際、男の子にチューをするようになったのです。…略…。

さて、もしあなたが貴絵ちゃんに突然チューをされたらどうしますか？

ア) 貴絵ちゃんだから笑って許してあげる

イ) いやだけど、やさしく「だめだよ」と言う

ウ) 気持ちが悪いので逃げてしまう

エ) 「ヤダー、やめてよ。」と強く言う

あなたは、ア)～エ)のどれを選びましたか？貴絵ちゃんが障害をもっている子だとわかっている人

はア）やイ）を選んだかもしれません。でも、貴絵ちゃんのために最も親切なのはエ）ではないでしょうか？貴絵ちゃんは今、とても大切な勉強をしています。…略…。人間はいろんな経験や段階を経て大人になっていきます。その歩みは人によってさまざまなのです。もし、ここで、貴絵ちゃんを特別扱いしたら貴絵ちゃんは次の大人への階段をのぼることができないのです。本当の親切は貴絵ちゃんを自分と対等の人間として見ることです。いけない事や嫌な事は貴絵ちゃんにわかるようにきちんと伝えることが必要なのではないのでしょうか？

（略については筆者によるものである。）

本通信は、貴絵ちゃんにとって本当に親切なかかわり方とは何かを読者に考えさせることを目的に書かれた一枚であろう。しかし、ここには教師たちの「障害観」「障害児教育観」もまた著されていると考える。

「障害児」だからといって、いけないことを許したり、嫌なことを許したりすることは、本当の親切ではない。本当の親切は、障害のある子どもを「障害児」として見るのではなく、「一個人」としてその子どもを見ること、そして、その「一個人」として対等にかかわり合うことであるという教師たちの「障害観」「障害児教育観」がそこでは語られているといえよう。

ー通信ー みつぼし 第66号 平成8年10月31日

みんなと違うことは×（バツ）じゃない

いつも、みつぼしの掃除にきてくれている元気者のA君が掃除が終わった後、こんな事を聞きました。「ねえ、かよこ先生。翔ちゃんは何の病気なの？どうしてみつぼしに来てんの？」

「うーん。」

私は答えに窮しました。

「だってさ。裕太君はいつも廊下や教室でクルクル回ってるでしょ。貴絵ちゃんのはあんましお口をきかないでしょ。」

でも、よく子どもなりに観察して納得しているのだなあと感心してしまいました。確かにみつぼしにきている3人はみんなと違う所があるから、みつぼしに来てるんだよね。それは、その通り。だけど、「病気」だからきてるっていうのは、ちょっと違う気がする。

じゃあ、裕太君のクルクルはどう説明すればいいんだろう？貴絵ちゃんがお口をきかなかったり、キーキーいうのはどういうふうに言えば、わかってもらえるのだろうか？

でも、A君の言う通り、大勢のみんなと違うことは事実だよね。話は変わるけど、「猿の惑星」という映画を知っていますか？主人公が宇宙の中の惑星に降り立ったと思っていた。そこは実は地球だったというストーリーですが、その地球を猿の惑星と勘違いしたのも、そこに住む人の殆どが人間ではなくて、猿だったから、主人公はそこを猿の惑星と思い込んだのでしょう。

そう考えてみると、大勢と少数という発想は自然な発想なのかも知れません。だけど、A君の考えで大切なことがあります。それは、A君は、裕太君や貴絵ちゃんや翔太君がみんなと「違う」ことは言っていますが、「違うこと」＝×（バツ）じゃあないということです。違うことがいけないとは思っていないのです。違うから、みつぼしで勉強していると納得しているのです。そのことは決していけないことじゃない。それでいいんじゃない？って思っているのだと思います。ちがっていいのです。違うからこそ貴絵ちゃんや裕ちゃんや翔ちゃんはたまらない魅力を持っているのだと私は思うのです。

本通信は、A君から教師に寄せられた一つの疑問を通して「障害」とは何か、「障害児」とは何かを考えているものである。

そこで、教師はA君の「障害理解」「障害者理解」の様子に対し、上記のような反応を示して

いる。つまり、「障害」のある子どもは、大勢のみんなと確かに違うところがある。しかし、それはいけないことではない。違っていいのである。」というA君の「障害理解」「障害者理解」を認め、その考えを大切にしているのである。このことは、教師たちの「障害観」「障害児教育観」をも示している部分であるということができよう。

人とは少し違うところもあるが、でもそれが彼らの魅力となっている。そのような魅力をもった「一個人」として子どもたちを理解している。このような教師の「障害観」「障害児教育観」が示されていると考える。

以上、上記で取り上げた3つの学級通信より、筆者が解釈した教師たちの「障害観」「障害児教育観」を示す。

それは、障害のある子どもたちを「一個人」として捉え、かかわっていくという「障害観」であり、そして、そのように「一個人」として子どもたち一人ひとりを大切に、彼らと心を通わせ、共に何かを作り上げていく中で、彼らを育てていくという「障害児教育観」であるとまとめることができよう。

2. 教師たちのM学級の子どもへのかかわり

ここでは、M学級の学級担任である3名の教師たちのM学級の子どもへのかかわり方を学級通信より探る。

また、この2. 教師たちのM学級の子どもへのかかわり、は上記の1. M学級の担任教師の「障害観」および「障害児教育観」、からつながるものであると考えられる。なぜなら、教師たちの思想は、教師たちの行動、つまり、子どもたちへのかかわり方に影響を与えるもの、つながるものであると筆者は考えるからである。したがって、ここで紹介される教師たちの子どもへのかかわりは、1. で示した「障害観」「障害児教育観」、つまり、障害のある子どもたちを「一個人」として捉え、かかわっていくという「障害観」「障害児教育観」に基づいたものであるといえる。それらを踏まえ、学級通信よりM学級の学級担任である3名の教師たちのM学級の子どもたちへのかかわり方を探る。以下、それが著されていると考える内容を抜粋し示す。そして、それらをそれぞれ考察する。(括弧部分は、筆者により補足された部分である。また、略についても筆者によるものである。)

—通信— みつぼし 第7号 平成7年5月26日

根っこ

ここのところ貴絵ちゃんの興味は「根っこ」です。…略…。

管理主事訪問と言って、学校にとってはとても大切な先生方がお見えになる日でした。ちょうど、その管理主事の先生が「みつぼし」にお見えになる時間のことです。教材を取りに職員室に行てくると、貴絵ちゃんがいません。

「ははあん。」

「多分、あそこにいるに違いない。」

と私は思いました。自然の杜（みつぼし学級で作った農園がある場所。）に行くと、いました、いました。貴絵ちゃんは一りで大きなクヌギの木の根っこをあのかわいい指で掘っていました。

「何してたの？」

と聞くと、

「ネッコ」と答えました。見上げると、それは大きな木です。
「大きい木だねえ。この木の根っこなんだよ。根っこはもっともっと大きいんだよ。」と言うと、貴絵ちゃんは美しく芽吹いたクヌギの木をしばらく見上げていました。…略…。

（略については筆者によるものである。）

本通信は、根っこに興味を示す貴絵ちゃんとそのような彼女に対する教師のかかわりが描かれたものである。

授業の時間になっても姿が見えない貴絵ちゃんは、大きなクヌギの木の下で、最近気になっている根っこ掘りを繰り返している。そのような貴絵ちゃんに対し、教師は、何をしているかを彼女に問うたところ、「ネッコ」という一言が返ってくる。そして、教師は「大きい木だねえ。…」という言葉で貴絵ちゃんに返す。

子どもの見ているものに、考えていることに「共感」する教師の姿が、ここに描かれていると筆者は考える。本来ならば、その時間は、授業が始まっている時間であり、そして、管理主事が授業を見に来る時間である。そのため、多くの教師は教室へ戻り、授業を始めることで頭がいっぱいになり、「早く教室に戻るよ。」といった言葉や「もう授業は始まっているよ。」といった言葉を子どもにかけてしまうのではないかと。しかし、本通信に見られる教師の姿は、目の前の子どもが今見ているもの、今考えていることに一度付き合い、共感するという姿である。これは、子どもの見ているものや考えているもの、さらにいえば、子どもの気持ちを大切にしようとする教師の姿を示しているということができるであろう。

—通信— みつぼし 第22号 平成7年10月20日

楽しかった遠足

初冠雪をいただいた富士が、一面の銀色のススキの原にそびえ立ち、2年生の遠足はとてもステキでした。…略…。

我々教師たちもどうやら、子どもたちが落ち着いたのでお弁当にする事にしました。裕太君は大好きなあさみちゃんたちと一緒に、貴絵ちゃんは、りさちゃんやゆみちゃんたちに誘われてお弁当を広げていました。あれあれ、裕太君とあさみちゃんは、さっきけんかした友だちをお弁当に誘っていました。

「本当に裕太君はやさしいねえ。あれが人気の秘密なんだよね。」
と、遠くで私達は見ていました。…略…。

（略については筆者によるものである。）

—通信— みつぼし 第163号 平成11年6月15日

翔ちゃんの高速物語～その1～

5月20日、翔太君の初めての宿泊、林間学校。…略…。

入所式を済ませたあとは、班ごとに自然散策です。お弁当を食べたあとは、自由に自然の中で過ごすのですが、「どうしよう。翔ちゃんについていったほうがいいかなあ。う～ん。」と悩んだあげく、「よし！ちょっと班の子に頼んでみよう。」と思い任せました。5年生になりクラス替えしたので、クラスの子と関わりを持たせ、この林間学校はできるだけ5年生のひとりとして活動させたいと考えていたからです。…略…。

（略については筆者によるものである。）

上記の2つの学級通信には、子どもの活動を静かに「見守る」教師の姿が著されている。子どもたちが一人でできることや他の子どもと一緒にならばできることには必要以上にかかわることなく、静かに遠くから見守る、という教師の姿である。つまり、上記の学級通信には、教師たちの、M学級の子どもたちが自身でできることや他の子どもの助けを借りることのできることをしっかりと見極めている様子、そして、子どもたちを信じている様子が描かれているといえよう。

3. 子ども同士のかかわり

ここでは、M学級の子どもたちに対する教師たちのかかわり方を目にし、影響を受けた可能性があると考えられる子ども同士のかかわりを、M学級の子どもたちとその周囲の子どもたちのかかわりに焦点を当て探る。

ここでも、上記のように、筆者は、教師たちの思想は、彼らの言葉や行動そのもの、あるいは、それらの中に表れるものであり、そして、それらを通して子どもたちに伝わっていく、という考えを基盤としている。よって、3. 子ども同士のかかわり、は上記の1. M学級の担任教師の「障害観」および「障害児教育観」、ならびに2. 教師たちのM学級の子どもへのかかわり、とつながるものであると筆者は考える。

それらを踏まえ、ここでは学級通信より、M学級の子どもたちに対する教師たちのかかわり方に影響を受けた可能性があると考えられる子ども同士のかかわりを探る。以下、それが著されていると考える内容を抜粋し示す。そして、それらをそれぞれ考察する。

まず、はじめに紹介する学級通信は以下のものである。

—通信— みつぼし 第34号 平成8年2月3日

貴絵ちゃんを支えてくれているお友だち

2学期の終わり、1通のお手紙をいただきました。それは毎日貴絵ちゃんと一緒に登校してきている上級生のお母さんからでした。それには、その子が貴絵ちゃんと通学する事でいろいろ成長したと感じられること、「みつぼし通信」を読んで考えさせられる事があるとかが、書かれていました。

…略…、貴絵ちゃんには登校、下校の時にいくつかのこだわりがあって、そのことをさせてあげないと泣いたりしてしまうので大変です。でも、登校班のお友達は毎日、本当に根気よく貴絵ちゃんに付き合ってくれています。…略…（お手紙をいただいた子の）担任の先生にその手紙を見せ、お話を伺うと自分で考えて、自分の下駄箱は本当は東の昇降口にあるのに、貴絵ちゃんと同じ西の昇降口に変えてもらえないだろうか？と先生に申し出たそうです。責任感が強いと言ってしまえばそれまでですが、私はこの話を聞いて、この子も貴絵ちゃんに育てられているんだなあと思いました。

この子は、貴絵ちゃんを間違いなく学校に連れて来なければならないという責任感を強く持ったのは事実です。そこで貴絵ちゃんを連れて来るために、貴絵ちゃんを何とか理解しようといろいろ考えたのだと思います。

「寄り道しちゃだめよ。道路をちゃんと歩かなくちゃだめよ。」

と言っても、聞いてくれる貴絵ちゃんではありません。だから、自分の方から貴絵ちゃんに近づく努力をしたのです。貴絵ちゃんが何を考え、何をしたいのかを理解しようと努力をしていることが、実は人を理解することの根本だということを、貴絵ちゃんから教えられていたと言えるのではないのでしょうか？…略…。

（略については筆者によるものである。）

本通信では、通常学級の子どもがM学級の子どもを理解しようと努めている様子が描かれている。

こだわり行動がある貴絵ちゃんを、こだわり行動があるからと、どうすることもできないと諦め、かかわりを断ってしまうのではなく、貴絵ちゃんが何を考えているのか、何をしたいのかを考え、こだわり行動を、そして貴絵ちゃん本人を理解しようとしている通常学級の子どもの姿が描かれていると筆者は考える。

M学級の子どもたちを理解しようという、この子どもの思いは、以降で紹介する学級通信すべてに共通するものであり、子どもたちのかかわりの基盤となっている、最も大切なものであるといえよう。

では、M学級の子どもたちを理解しようという思いの下、子どもたちはどのようなかかわりを見せているのであろうか。

—通信— みつぼし 第4号 平成7年5月6日

貴絵ちゃんとお友だち

貴絵ちゃんにはいつも一緒に帰る仲良しのお友だちがいます。わかなちゃんとみかちゃん、それにりょうや君、のりひこ君が加わります。…略…

驚いたのは、わかなちゃんやみかちゃんたちは、そのこだわりをちゃんと知っていて、上手に貴絵ちゃんと付きあっていることでした。そして、自分たちも楽しみながら下校道を歩いています。…略…

「先生、貴絵ちゃんはね、ここまで来ると、今度はこの影の通りに歩くんだよ。」とすっかり、貴絵ちゃんのこだわりを飲み込んでいます。…略…

（略については筆者によるものである。）

本通信では、M学級の子どものこだわり行動を理解し、それを子どもたちなりに受け止めている様子が見られる。まさに、こだわり行動をその子どもの一部として捉えている部分であり、また、それはM学級の子どもを「一個人」として捉えているということを示しているともいえよう。

—通信— みつぼし 第11号 平成7年6月23日

1年4組のみんなへ

…略…

2週間ほど前だったか、給食のあとのことでした。翔太君と私は、給食の片付けで、牛乳ビンを片付ける係になっています。1班のお友達の分も含めて7本を黄色い牛乳のケースに片付ける仕事です。「ごちそうさま。」をした後、翔太君は、教室内を歩きまわるいつもの行動？をとっていました（外を見たり、くるくる回ったり、そうしながら給食着を脱ぐようです）。その時ある男の子が来て、だまって自分のお盆に、翔太君が片付けるはずの牛乳ビンを何本かのせて、残りのビンを指して、

「翔ちゃんの分は、これね。残しておくから。」

と言って片付けてくれました。ほんの一瞬のことでしたが、その子の優しさと、翔太君の役割を残していくといった教師のような行動？に驚かされました。…略…

子どもたちは、翔太君に対して、ほんとうに純粋に「なにかしてあげたい。」という優しい気持ちがあるのだと思います。また、強い仲間意識も。私は、翔太君と1年4組の子どもたちから大切なことを学ばせてもらっているような気がします。…略…

（略については筆者によるものである。）

本通信は、M学級の子どもたちにそれぞれに応じた役割を取っておく子どもたちの姿が著されている。本通信には、牛乳ビンを片付けるという仕事を与えられている翔ちゃんを、通常学級の子どもたちが自然に手伝う。しかし、すべてを手伝ってしまうのではなく、翔ちゃんのできることや彼の役割をしっかりと理解していて、翔ちゃんにも仕事を取っておく様子が描かれている。

これは、通常学級の子どもたちがM学級の子どもたちのできることを理解しているということ、彼らがM学級の子どもたちの仕事、役割を理解していること、そして、M学級の子どもたちを「一個人」として、さらに、同じ学級の「一仲間」として捉えていることを示しているといえるであろう。

M学級の子どもたちに「必要最低限の支援」をする通常学級の子どもたちの姿が描かれている学級通信は他にも存在する。以下、それを紹介する。

—通信— みつぼし 第55号 平成8年7月5日

黒板の文字

ついこの間、2年4組の教室に行き何気なく黒板を見ると、右端の日直と書かれた文字の下に、「しょうた」「りょうた」とチョークで書いた名前がありました。「しょうた」の方は、どう考えてもそのスペースには不釣り合いな大きさの文字で書いてあります。「あれ？えー」と思ったのですが、やっぱりその文字は、いつも見ている翔ちゃんの文字に間違いありません。

よく自分の名前が、黒板に、しかもチョークで、さらに決められた位置に書けたものだと思います。担任としては、不思議な気持ちです。

「どうやって、書かせたのだろう。」2年4組の友達が手伝ってくれたのだろうとは想像できるけど、手を持って書かせたような字ではないし、また手を持っても、なかなかこちらの思ったようには文字を書いてくれないことも良くわかっているの、考えは深くなるばかりです。

「ねえねえ、黒板の名前、翔ちゃんが書いたんだよねえ。どうやって書いたの？」

「あのねえ、よっちゃんが紙に『しょうた』って書いて、黒板に張り(ママ)付けて、翔ちゃんが、それをまねしてとりに書いたの。」

とあさみちゃんが教えてくれました。…略…

(略については筆者によるものである。)

この学級通信で書かれている子どもたちは、M学級の子どもたちのできること、さらに、どんな支援があれば彼らが一人でその行為ができるのかということを理解した上で彼らにかかわっている。つまり、M学級の子どもたちに対して支援を行っているが、それが必要最低限の支援となっているということである。

このことは、M学級の子どもたちが自分でできること、どのような支援があれば彼らが自分でその行為ができるのか、ということを子どもたちが理解し、それらを大切にしながら彼らとかかわっている様子を示しているといえよう。

これは、通常学級の子どもたちがM学級の子どもたちをよく見ているということでもあるし、彼らに教師たちがどのようにかかわっているのかを実はよく見ているということでもある。そうでなければ、子どもたちは「お手本を隣に置き、それを翔ちゃんに見せて文字を書かせる」ということを思いつくであろうか。教師の日頃の行動が子どもたちの手本となり、彼らに影響を与え

ていることが非常によくわかる学級通信である。

V. 考察

上記を総括し、教師の姿が子どもたちの障害理解に影響を与え、それを深める可能性をもつものであることを示す。

上記のように、筆者は1. M学級の担任教師の「障害観」および「障害児教育観」、2. 教師たちのM学級の子どもへのかかわり、3. 子ども同士のかかわり、の項目がその順でつながるものと考え、本論を展開している。よって、考察もこれを踏まえて行う。

まず、1. M学級の担任教師の「障害観」および「障害児教育観」では、それぞれが障害のある子どもたちを「一個人」として捉え、かかわっていくという「障害観」「障害児教育観」であると明らかになった。上記にしたがえば、これらが教師の言葉や行動の基盤となっているということである。

よって、2. 教師たちのM学級の子どもへのかかわり、で紹介した教師の様子は、1. M学級の担任教師の「障害観」および「障害児教育観」に基づいたものであるといえる。2. 教師たちのM学級の子どもへのかかわり、で見られた教師たちのかかわりに項目名をつけて示すならば、それは「共感」「見守り」の2つに分けられるであろう。それらは、それぞれ、子どもたちの見ているものに、考えていることに「共感」するということ、子どもたちが一人でできることや他の子どもと一緒にできることには必要以上にかかわることなく、静かに遠くから「見守る」ということ、と具体化できる。

また、これら2つの教師たちのかかわりには共通するものがあると筆者は考える。それは、M学級の子どもたちを「一個人」として捉え、「一個人」として大切にしようとしているということである。子どもたちの見ているものや考えていることに関心を寄せ「共感」する教師の姿には、子どもたちの見ているものや考えていることを大切にしようとする教師の姿が重なっている。子どもたちを静かに「見守る」教師の姿には、子どもたちの力を信じ、それを大切にしようとする教師の姿が重なる。このことは、上記の1. M学級の担任教師の「障害観」および「障害児教育観」、に通ずるものであり、1. M学級の担任教師の「障害観」および「障害児教育観」、が2. 教師たちのM学級の子どもへのかかわり、を支えているということを示しているといえよう。さらに言い方を替えれば、これは教師の思想が彼らの言葉や行動の基盤になり、それらを支えていることを示しているということであり、また、このことは筆者が考えている「教師の思想や人格が彼らの言葉や行動を支えている」という考えを支える実践的根拠となり得ると考える。

さて、この2. 教師たちのM学級の子どもへのかかわり、は、上記にしたがえば、3. 子ども同士のかかわりにつながるものであるといえる。では、3. 子ども同士のかかわり、で見られた、子ども同士のかかわりにはどのようなものがあげられたのか。項目名をつけて示すならば、「理解」「必要最低限の支援」の2つに分けられるであろう。また、それらは、M学級の子どもたちの障害やそれに基づいた彼らの行動をもすべて含め「その子」として「理解」しようとかかわること、M学級の子どもたちの力を尊重した「必要最低限の支援」をしながらかかわること、と具体化できる。

そして、そこには、通常学級の子どもたちがM学級の子どもたちを「一個人」として捉え、「一

個人」として彼らとかかわろうとする姿が共通して存在するということできるであろう。このことは、3. 子ども同士のかかわり、が2. 教師たちのM学級の子どもへのかかわり、とつながっていることを示すものであり、教師の思想や人格が基盤となった彼らの言葉や行動が子どもたちに伝わるということを示しているといえる。そして、このこともまた、筆者が考えている「教師の思想や人格が彼らの言葉や行動を通して子どもたちに伝わっていく」という考えの実践的根拠となっているといえよう。

本研究では、「教師の思想や人格が子どもたちに伝わっていく」ということ、そして、「教師の思想や人格、および、それらに基づいた彼らの言葉や行動が子どもたちの障害理解を深めていく」ということを考え、その実践的根拠を探ってきた。W小学校のいくつかの実践を紹介し分析していく過程で、その実践的根拠を示すことができたとは筆者は考えている。つまり、教師の思想や人格は彼らの言葉や行動を通して子どもたちに伝わり、子どもたちの思想や人格を築き上げていく一要素となり得るということである。そして、それは筆者が考える「人が生きることを問う障害理解教育」が、ただ理論として存在するというものではなく、実践としても十分に展開することが可能であるということを示しているということができるであろう。

文献

- 1) 加藤映美（2015）小学校における障害理解教育の課題－理念と実践との間にある隔たりに着目して－. 平成26年度 山梨大学教育人間科学部 卒業論文.
- 2) 加藤映美（2017）障害理解教育の歴史的変遷－「障害理解教育」の概念の明確化に向けて－. 山梨障害児教育学研究紀要, 11, 15-25.
- 3) 加藤映美（2017）「障害理解教育」への教育方法論的接近－新たな可能性を目指して－. 平成28年度 山梨大学大学院教育学研究科 修士論文.
- 4) 中込香代子・新津弓彦・依田真規子（1998）みつぼし通信－若草小学校みつぼし学級の記録－. 新読書社.